地域社会に貢献できる実践力の育成

―― 地域社会との繋がりを体験する授業実践 ――

木村 勢津

愛媛大学　教育学部

Enhancing practical ability that can contribute to the community

―― Teaching practice to experience the connection with the community ――

Setsu KIMURA

Faculty of Education, Ehime University

はじめに

愛媛大学教育学部 芸術文化課程 音楽文化コースのディプロマポリシーには，演奏・作品創作や音楽の学問的研究などで培った知見をもとに，音楽文化に関するさまざまな課題について，適切な対応を考えることができる。(思考・判断)，人と音楽との関わりや音楽の持つ深い精神性を理解し，音楽を通じて社会に広く貢献できる。(態度) の文言が掲げられている。

カリキュラムにおいて，得意とする分野の専門的知識や，音楽文化の振興に貢献するための高い演奏技術の修得，また，音楽的表現力の育成を目的とした専門科目は整備されている。授業で修得した演奏技術や音楽的表現力を活用した演奏活動の場も提供されている。しかし，そのほとんどは，一般の聴衆や教育機関と密接な関係をもった聴衆を対象としたものである。

筆者が担当する「声楽実習②」および「声楽実習④」の授業では，平成23年度に，松山市内の民間企業の協力を得て，カルチャースクールに通う方々を対象とした訪問演奏を実施した。演奏内容は，授業で学んだドイツや日本の作曲家の重唱作品を中心としたもので，演奏者の嗜好や都合を優先した選曲であった。聴衆は，歌唱への関心が高く，自らの演奏に対してもアクティブな姿勢を有する方々であったため，受講生の演奏に対する意識も，授業で得た知識や技術を演奏に反映することに傾倒した。

平成24年度は，訪問先の聴衆のニーズに応える独自性豊かな企画と充実した内容の演奏を目指し，授業を展開した。

筆者は，地域社会における音楽文化の振興は，様々な環境に生きる人々を対象としてなされるものであり，また，継続的な音楽活動を成立させるためには，発信者（＝演奏者）が受信者（＝聴衆）のニーズに即した質の高い演奏を供給し，地域に寄り添った活動を行うことが重要であると考えている。この観点から，次世代の音楽文化の振興を担う学生たちには，様々な場での演奏体験を通して，ディプロマポリシーに掲げた**＜人と音楽の関わりや音楽のもつ深い精神性＞**について，深識を抱いて欲しいと願っている。また，地方において，演奏者が演奏にのみ専心できる環境は希有である。企画立案や運営に携わりながら，演奏活動を行うことが余儀無くされることも少なくはない。

これらの観点から，地域社会との繋がりを演奏を通じて実際に体験し，音楽が社会に果たす役割や，地域社会における音楽文化の振興とは何かを学生に問い，地域に貢献できる有能な人材の育成を目的とした授業実践を試みた。

授業の概要

本授業は，音楽文化コースの学生を対象として，「声楽実習②」と「声楽実習④」の科目名で開講している。１年次の基礎科目である「歌唱基礎」「声楽①」，２年次の発展科目に位置する「声楽②」「声楽③」の受講を経て，３年次前期の「声楽④」「声楽実習①」を履修し，後期に応用科目として「声楽実習②」の履修が可能となる。４年次の「声楽実習④」と合同で行われ，音楽文化コースのカリキュラムマップ上では，理論と演習の複合的内容を取り扱う総

合科目として位置づけられている。

平成24年度の受講者は，音楽文化コース６名，学校教育教員養成課程２名の計８名であった。各学年４名の構成で，性別は，男子１名，女子７名，専攻領域は声楽６名，器楽（ピアノ）２名であった。

大学から地域社会に発信できる演奏会の開催を目指し，演奏会開催の条件及び到達目標を以下のとおり定めた。

1）演奏会場に自らが足を運ぶことが困難である聴衆を対象とする演奏
2）聴き手のニーズを思索し，自らの知識や能力を駆使しニーズに応える演奏
3）共演者と音楽（歌）の楽しさを享受し，かつ協働を実感できる演奏
4）地域社会において，音楽を愛好する人々との繋がりを深める演奏

授業運営は，受講生の自主性，主体性に重きを置く展開を心掛け，プログラムの構成，選曲および演奏形態の決定，練習計画，各回の授業進行案などについては，受講生に委ねた。筆者は，音楽表現および舞台表現方法に関して，受講生の抱くイメージを具現化するための技術的指導と受講生と外部協力者との連携について主に助力した。

演奏会の開催は，松山エデンの園（介護付有料老人ホーム）の協力を得て，同施設内の玄関ロビーにおいて行われ，約４５分間の演奏を行った。プログラムは以下に示す３部構成とした。プログラムの詳細は，巻末の図８（電子版では割愛）に別途記載した。

第１部－クラシック，ポピュラー，ミュージカル，合唱曲等のジャンルから選曲し構成した創作音楽劇
第２部－ピアノ連弾，唱歌メドレー，なつかしの歌謡曲で構成したバラエティー豊かなステージ
第３部－同施設内のコーラスサークルの方々による演奏および受講生との共演ステージ

なお，訪問施設内に常設するコーラスサークルの方々との共演をプログラムに織り込んだため，授業時間外活動として，受講している４年生２名が演奏会前に２度施設を訪問し，歌唱指導を行う機会を設けた。

（第１部　音楽劇「歌でつなぐ新婚旅行」の演奏風景）

（第３部　コーラスサークルとの合同演奏風景）

以下，授業流れを図１に示す。

第１回　授業概要の説明
・授業の目的・意義・スケジュール・評価方法等の説明。
・自らが公共の演奏会場に足を運ぶことが困難な聴衆を対象とする。
・演奏会場の選択肢についての説明。
（盲学校，介護付き有料老人ホーム，終末期ケアー実施の医療機関等）
第２回　訪問先の決定と受講者各自の枠割り分担について
・提示した各演奏会場のメリットとデメリットを検討。
・自らの能力，他の受講生との合わせに要する練習時間を確認。
・外部の方との合同演奏の有無等を検討。
・役割決め（練習日程担当・プログラム作成担当など）
第３回　聴衆のニーズに即した演奏会を開催するため
・聴衆の年齢・性別等の基本情報の収集。
・聴衆の成育期，青年期，壮年期の社会情勢，当時の文化の流れを知る。
・プログラム案を作成するまでの流れ。
第４回　プログラムの概要検討
・音楽専攻生ならではの特色あるプログラム構成についての検討。
・施設入居者へ思い出の曲に関するアンケート調査の方法について指導。
第５回　具体的選曲と実技指導
・第１部－クラシック音楽やポピュラー音楽を織り交ぜ，独唱，重唱の形式を取り入れた音楽劇
第２部－成育期や青年期，壮年期に歌った思い出の曲を基本とし，施設内で結成されたコーラスサークルとの音楽交流を含めた選曲
第６回　演奏会に向けての諸準備について＆実技指導
・施設担当者，コーラスサークル指導者への連絡の取り方について指導。
・プログラム，ポスター等の制作について検討し，準備を開始。
第７回～第11回　実技指導
・音楽劇の台本および楽曲配列の検討。
・思い出に残る曲の選曲とプログラム構成（楽曲の配列）の検討。
・各楽曲の個別指導。
第12回　リハーサル
第13回～第14回　仕上げのための実技指導
・リハーサルでの問題点の洗い出しと改善。
・当日の役割分担，舞台配置，小道具等の確認。
・演奏会終了後の挨拶文の作成の指導。
（施設のコーラスサークル活動日に合わせて，合同演奏曲の歌唱指導と伴奏合わせを行うため，受講生代表２名が施設を２度訪問。）
第15回　演奏会
・会場設営。
・施設のコーラスサークルとの合同練習。
・交流演奏会。
・会場後かたづけ。

図１．授業の流れ

授業の成果

本授業の成果について，演奏会終演後に実施したアンケート調査の分析により検証した。

アンケートは，A. 演奏会に来場した同施設入居者と職員，B. 共演したエデンの園コーラスサークルのメンバー（指導者を含む），C. 授業受講生８名を対象として，各対象者に異なる内容で実施した。評価は，１を肯定的評価，

５を改善の必要性を示唆する評価とした５段階評価方式と記述方式を併用して行い，無記名によるものとした。アンケートの回収率は，B. 共演したエデンの園コーラスサークルのメンバー（指導者を含む）対象が92%，C. 授業受講生対象は100%であった。なお，A. 演奏会に来場した同施設入居者と職員を対象としたアンケートについては，回答可能な方のみに配布する方法で行い，25名からの回答を得た。

１．聴き手のニーズに即した演奏

図２に示すとおり，プログラム構成（選曲や曲の順番，劇つき音楽など）を問う設問に対して，１とても良い，２かなり良いの回答合計は96%であり，その妥当性については高評価を得ている。

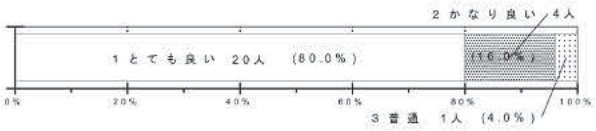

図２．プログラムの構成 （n＝25）

表１は，演奏に関する感想（自由記述）のうち，企画や演奏に関する肯定的評価の記述をまとめたものである。改善点についての記述は，続く表２に示した。

表１．企画・演奏に関する評価

◇普通の演奏会のように順番に演奏すると思っていたので思いがけない展開。
◇自分も自然に演奏に入っていけて楽しいひとときだった。
◇素晴らしい演奏に癒やされた。
◇楽しいコンサートをありがとうございました。
◇来て歌っていただけたことにまず感謝。
◇生まれてはじめてオペラをみました。楽しかった。
◇楽しい企画だった。
◇プロに比べると素人くさいところがあるが，そこも大学生としての良さ。
◇色々なジャンルの中から選曲されて良かった。
◇選曲に演出に知恵を絞ってくださっていると感じた。
◇昔ブロードウェイでみたミュージカルを思い出した。
◇演出もおもしろいと思った。
◇コーラスグループのメンバーもきっと楽しいコンサートだったと思う。
◇学生さんたちの表情豊かなこと，その輝きに若いエネルギーを覚えた。
◇合唱がよかった。礼儀正しいのも良かった。
◇身近ですばらしいコーラスを聴くことができた。
◇学生さんがコンサートを楽しんでいるのがオーディエンスにも伝わった。
◇～春の訪れを～運んで来てくださったことに感謝。
◇若い人の演奏を年に1回は聞きたい。

表２．企画・演奏の改善点

◆コンサートの参加者は65～90歳。もう1世代前の曲が入れば良かった。
◆全体として，私達にとっては，もう少し旧い曲，歌がよい。
◆最後に，一緒に歌って終了する方がよかったと思う。
◆学生らしい髪型（髪の色）だと清潔感が一層あると思う。

表１から，学生たちの演奏技量はともかく，演奏会全体の企画，プログラム構成の工夫，演奏態度，表現意欲等については概ね受け入れられており，聴き手のニーズを満たし，一定の成果を上げることができたと捉えることができる。表２からは，会場全員で歌える曲や具体的選曲方法についての検討が今後の課題であることが読み取れる。

選曲については，当初，施設入居者を対象とするアンケート結果を基に行い，プログラムを構成する計画であった。受講生は，楽曲選択方式のアンケートを考えたが，楽曲の選定に当たり，年代別の楽譜資料を見る段階で，受講生自身が知らない楽曲も多く，絞り込めない状態に陥った。そこで，思い出の曲を記述する方式が受講生から提案され検討を行ったが，訪問演奏は限られた時間での演奏であり，リクエストされた楽曲が演奏されなかった場合の回答者の心情に配慮し，アンケート実施を見送った。改善点に選曲が挙げられたのは，聴き手への充分なリサーチが行われなかったことも要因のひとつと考えられる。

２．共演者と音楽（歌）の楽しさを享受し，かつ協働を実感できる演奏

今回のプログラムでは，エデンの園コーラスサークルの方々と東日本大震災応援ソング『花は咲く』の合同演奏を組み入れた。これは，他者と音楽を創りあげる楽しさの共有を目指すもので，出前型の演奏会で終わることなく，協働型の演奏会を目指すことを目標としたためである。

学生との共演の成果を，図３のコーラスサークルの方々の共演満足度と自由記述の感想をまとめた表３で示した。

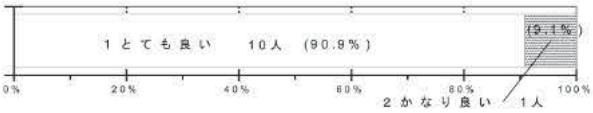

図３．学生との共演満足度 （n＝11）

表３．共演に関する感想

演奏について
◇難しいと思っていた「花は咲く」を合唱させていただき，感謝している。
◇学生さんがわざわざ練習に来園され不充分な箇所を細かく教えてくれた。
◇当日は，まだ不安だったが，バックから学生のぶ厚い合唱に助けられた。
◇後列から聞こえてくる混声に勇気づけられて一生懸命歌うことができた。
◇学生さんお一人お一人の力に感心した。
◇8名の方々が，一つになった結果に感銘を受けた。
◇人前で歌うことに慣れていない私たちを引っ張ってくださり感謝。
態度について
◇最後に退場する時にも足元に気をつけて下さり，手をさしのべてくれた。
◇ひな壇の上り下りに男子学生さんが手をたずさえて下さって助かった。
◇学生さんの前向きな姿勢に好感がもてた。
その他
◇素晴らしい企画に一緒に参加でき嬉しかった。
◇大変楽しかった。また，このような日が来ればうれしい。
◇今後も愛大生のコンサートに出合えることを願っている。
◇皆さんからいっぱい元気をいただいた。
◇今後も花井先生のご指導でシルバーコーラスなど言わせないよう頑張る。
◇これからも一緒に歌いたい。

２つの結果から，共演を概ね満足と感じておられることが判る。その背景には，以前より歌いたいと願っていた楽曲で共演できたこと，事前の学生による訪問指導，舞台上における学生の配置などがあり，コーラスサークルの方々が安心して歌唱できる配慮の成果として捉えている。高齢者にとって，若者との共演が自らの演奏向上の志向を高め

る誘因となり，今後の音楽活動の励みとなり得ることも，この結果から知ることができよう。

外部に向かって積極的に発信する機会の少ない状況下にある高齢者にとって，学生との交流演奏が，老後の豊かな音楽生活を送るための一助となったこと。**＜人と音楽の関わりや音楽のもつ深い精神性＞**を学生が見知できたこと等，共演の意義と成果があったと考えられる。

表４は，受講生に実施したアンケートのうち，本授業を受講して良かった点に関する自由記述から，学生の協働に対しての視点が読み取れる記述をまとめたものである。

表４．協働に関する記述

◇若さのエネルギーを伝えるという自分たちならではのことができた。
◇このメンバーだからこそできるオリジナルの音楽劇ができた。
◇自分たちで選曲を行い，自主的に練習して，コンサートを無事に終えた。
◇大変になった時こそ，全員で頑張ろうとの気持をお互いが高め合えた。
◇何度か嫌な思いをしたが，演奏会前や終了後に，やって良かったと思った。
◇学生がやればやる程，内容の濃いものができると実感できた。
◇回生に関わらず，一つの舞台を作るために意見交換できる環境，雰囲気。

学生は，練習過程で，受講者間で生じたトラブルを始め多様な経験を通じて，意志の疎通を図ることが，良い演奏の不可欠要素であることを感得し，協働の重要性を学んでいる。しかし，コーラスサークルの方々との協働意識は必ずしも高くはない。合同練習が当日のリハーサルのみの１回であったことに起因すると考えられるが，コーラスサークルの方々との協働意識の差があることは否めない。

３．地域社会において，音楽を愛好する人々との繋がりを深める演奏

この訪問演奏の目標として，地域社会において，学生たちが演奏活動を通じて，コミュニケーション能力を養い，年齢や環境の違いを超え，共に演奏することで，音楽を愛好する心の繋がりを感得することを目指した。

共演者であるコーラスサークルの方々の感想は，すでに表３で示したが，表５では，聴衆の方々が学生たちの演奏から得られたものとして感じていることをまとめた。

表５．演奏から得たことに関する感想

◇閉じ籠もりがちの私達の生活の場に来て頂き，爽やかな気分になった。
◇大学で音楽課程を学ばれている学生さん達の素晴らしい力を実感できた。
◇とても楽しく元気を頂いた。
◇若い人に接することがあまりないのでとても良かった。
◇大変楽しいひととき，“若い”みなさまから“元気”を貰えた。
◇まっすぐに将来を見据えて頑張っている熱気が拡がり，元気を頂いた。
◇若い方達の演奏にとても元気をもらった。
◇学生さんたちの表情豊かなこと，その輝きに若いエネルギーを覚えた。
◇自分たちの中に明るい気持ちが拡がった。又聴かせてください。

「元気」「若い」という言葉が多く用いられていることに着目したい。施設で暮らす高齢者にとって，施設外の人々，とりわけ若者との接触が，生きる意欲や日々の中で小さな幸せを見出すことに繋がっていることが判る。共演したコーラスグループの方々と同様，聴衆の方々も鑑賞により，前向きな思考を持つことができたと考えられる。

表６では，受講生が本授業や訪問演奏を通じて学んだことの中から「人との繋がり」や「音楽の効用」に関して記述したものを抽出した。

表６．学生が学んだ「人との繋がり」

◇音楽が高齢者の方に与える影響力である。
◇皆さんの反応は，演奏から感じたことを素直に受け取ってくれた。
◇練習の際から聴いてくださる方の気持ちになり，客観視することが大切。
◇聴いてくださる方の反応を見ながら臨機応変に応じて行く行動力。
◇お客さんを考えて選曲をすることやプログラムを作ることの大切さ。
◇「私が弾きたい」より「聴く側が何を求めているか」を考えること。
◇ひとつの演奏会をつくり上げるにあたって，多くの人の繋がりがある。
◇世代の違う人たちとの接し方。
◇聴き手との年齢差から，相手の立ち場に立ち演奏会を作ることが難しい。
◇関わってくださる方々を最後まで気遣うということ。
◇外部の人と一緒に行動する際の心配りや礼儀。
◇訪問先とコンタクトを密にとることの大切さ。
◇会場の事前調査，訪問先の方との密接な連絡を取ること。
◇信頼関係の大切さを学んだ。
◇感謝の気持ちを忘れず，周囲の人への礼を欠かずに行動していくこと。
◇たくさんの方に多大なご協力を得て，素敵な有意義な時間を得た。
◇社会には，色々な人がいて，私たちはたくさんの人に支えられている。
◇演奏させてもらえることは，とてもありがたいことなのだと痛感した。
◇社会とのつながりを大切にし，感謝の気持ちを忘れないようにしたい。
◇本番では，たくさんの方が直接声をかけて下さり，本当に嬉しかった。
◇喜んでいる顔を目の前でみることができて，大きな喜びを頂けた。
◇地域の繋がりを大切にするということは，こういうことなのかと思った。
◇音楽が一番大切にしなければならないことは人間であること。
◇誠心誠意で取り組んだことが受け入れられたことは人生において有意義。

これらの記述から，演奏には聴衆の存在が不可欠であり，聴衆の立場に立って企画，演奏を行うことが地域社会の音楽活動には重要であること，また，聴衆に演奏を享受してもらうためには，演奏技術の修得ばかりでなく，主体的に，自らの人間形成に取り組まなければならないことを受講生が学んだことが判る。演奏者としての心掛けの基本は礼を尽くすことにあり，人と人の繋がりや信頼関係を大切にすることが，演奏会の成功に繋がることを多くの受講者が感得したことが伺える。また，聴衆の喜びが自らの喜びに通じることなど，演奏によるコミュニケーションや音楽の効用についての気づきが読み取れ，「人との繋がり」を学んだことが判る。

４．学生が認識する授業の意義

筆者は，冒頭で本授業を音楽文化コースが掲げたディプロマポリシー（DP）＜人と音楽の関わりや音楽のもつ深い精神性を理解し，音楽を通じて社会に広く貢献できる。（態度）＞に対応した実践授業として位置づけたいと述べた。図４は，DP への授業対応について，授業終了後に問うたアンケート結果である。受講生の87.5％が１充分対応

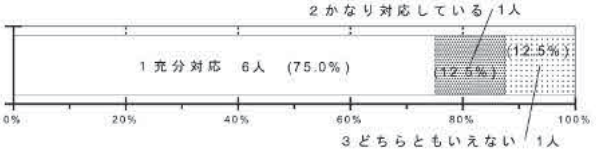

図４．DP への授業の対応 （n＝８）

している，もしくは２かなり対応していると回答した。３のどちらともいえないの回答は，本授業に参加した学校教育教員養成課程の学生による回答で，DP が芸術文化課程と異なることによるものと推測される。

続く図５で，施設訪問についての満足度についての回答結果を示した。図４の DP 対応と同じ結果となった。

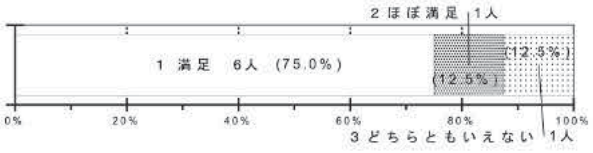

図５．施設訪問について （n＝８）

図６は，本授業の特徴でもある学生主体の授業運営についての評価結果である。４あまり満足していないと回答した１名を除き87.5%の学生から１満足（６名）もしくは２ほぼ満足（１名）の回答を得られた。訪問演奏までの過程は大変であったが，授業の運営については，概ね満足できたと分析した。満足感を得られなかったと回答した学生は，授業の展開前半で学生間で発生したトラブルの解決に労力を費やしたためと推測している。協調性が求められるアンサンブルにおいて，授業や練習が円滑に行われるためには，授業者は，受講生の人間関係を充分に把握し，トラブル発生時に，問題解決の糸口を早期に提示できることが肝要であり，この対応が不十分であったことが回答結果に繋がったものと思われる。

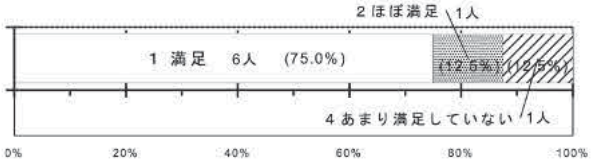

図６．学生主体の授業運営について （n＝８）

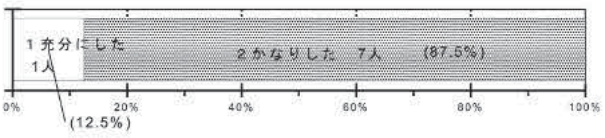

図７．事前事後学習について （n＝８）

図７は，事前事後学習に関する自己評価結果である。全員の学生が１充分にした，もしくは２かなりしたと回答し，まじめに課題に取り組んだことが判る。45分の演奏を行うための準備は，容易ではないことを実感し，ソロやアンサンブル等，演目に応じた練習時間を設定したものと思われる。さらに，音楽劇の台本作成を始めとしたプログラム充実のための時間や学外協力者への連絡等，演奏練習以外の時間も多く費やしたことが推測される。

表７に学生が提案した授業の改善点を記した。

表７．学生が提案する授業の改善点

◆授業時間内と外で進行している部分についての確認作業が必要。
◆演奏会のための各種振り分けを更に細かく早くに行った方がよい。
◆授業開始前に，進行の方向性を確認し，授業を展開した方がよい。
◆受講者が同じモチベーションで授業に臨む。

授業開始当初，学生間で情報の共有化が充分に行われていなかったこと，受講者のモチベーション統一までに時間を要したことが，改善点として上げられている。後学期の12月には，学生たちの自主演奏会なども企画されており，彼らにとって，準備に充分な時間を要するこの授業はかなりの負担であった。授業者は，情報の共有化に努め，ひとりひとりが責任をもって役割を果たす指導を丁寧に行う工夫が必要であった。

図４～６に示した結果や表７の記述から総合的に判断すると，殆どの受講者は，本授業における演奏の目的と意義を理解し，本授業によって得られるであろう成長と成果を期待して受講したこと，また，受講者間の人間関係については，生じた課題を自らが解決しようと努力しつつ，授業に取り組んだことが判った。これは訪問演奏会という明確な目的を持ち，自分たちの得意な分野によって，学外の聴衆に発表できる場が与えられたことに因るものと推察する。更に，プログラムの中にアンサンブルを配したことや，受講条件に必ずアンサンブルのプログラムに出演することを課したことも成果を得た要因であったと振り返る。

ま と め

筆者は，この授業実践を通して，受講者が地域社会において演奏活動を行うことの意義や人と音楽との関わり，そして音楽が有する魅力について，各々が自分なりの考えを構築することができたものと考えている。とりわけ，高齢者に音楽が与える影響について考えを深め，訪問演奏の体験を通じて得た成果は，今後の学びや演奏活動に影響を与えるものであると確信している。加えて，本授業での体験は，主体的な音楽活動を展開できる能力の育成に有益であったと感じている。

しかし，受講者の殆どが，演奏会開催の協力者や支援者に感謝の念を抱くことはできたものの，「協働」は対象者を学生と捉える傾向が認められた。どのような協働意識を有するかは，地域社会における音楽文化推進者として重要な問題である。世代を超えた協働者(共演者)に目を向け，また，聴衆との協働を求める姿勢を育みたいものである。

芸術文化振興の恩恵は，老若男女を問わず，あらゆる環境下において，平等に受けることができる社会が望まれる。高齢化や少子化の進む現代社会において，あらゆる世代や環境の人々が，能動的に音楽活動が行えるための支援や共に活動できる社会づくりに貢献できる学生の育成が，音楽文化コースの役割の一端であろう。地域社会と連携

し，学生が積極的に活動できる実践の場の提供システムを構築することも，今後の課題としたい。

謝　　辞

稿を終えるにあたり，熱心に参加してくださった受講生の皆さん，授業の趣旨をご理解いただき，学生に演奏の場をご提供いただいた松山エデンの園の皆様，学生と一緒に演奏してくださったエデンの園コーラスサークルの皆様，ならびに同サークルの指導者であり，学生の指導実習にご助力くださった花井智津子先生に深謝申しあげます。

図８．エデンの園　ふれあいコンサート　プログラム